

〈研究会発表要旨〉

九州出土の玦状耳飾

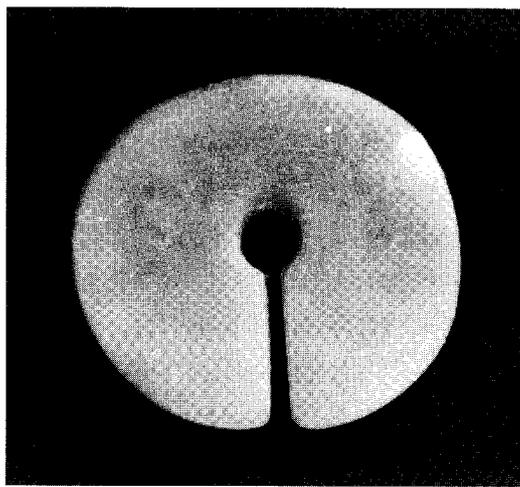
下 村 智 (文学部助教授)

東アジア全体に分布する耳飾の一種に玦状耳飾というのがある。これは環状の一箇所に切れ込みを入れ、耳たぶに穴を開けて垂下装飾する耳飾である。わが国の玦状耳飾の起源に関しては、国内自生説、中国江南渡来説、中国東北部・沿海州渡来説などが提示されている。そこで、わが国の玦状耳飾を考察するためには、大陸に最も近い九州地方の資料を整理・検討しておくことが重要であると考えられる。ただ、九州地方発見の資料は発掘資料が少なく、現時点では解決できない問題も多い。以下、これまでの資料を整理検討した結果を示しておく。

まず、九州地方ではこれまで資料が少ないといわれてきたが、45遺跡以上、70点近くの出土例があり、成品の出土量、分布密度はきわめて高い地域であるといえよう。形態的には円環形から長脚タイプまで、国内で発見されているほとんどのタイプが存在する。出現時期は、縄文早期末に遡る例があり、轟B式を中心とする前期に盛行する。前期後半代には大型化し、中期初頭に終焉を迎える。これは国内で発見されている資料と基本的には同じ変化過程をとり、広い地域で連動していたことが窺えよう。石材については、結晶質石灰岩、陽起石、透輝石、蛇紋岩、角閃岩、滑石と貝、骨製品がある。大部分は結晶質石灰石と軟玉系の陽起石、透輝石

が中心となり、蛇紋岩や滑石は他地域に比べ極端に少ない。これは九州地方に多出する石灰岩地帯の石材を使用したためで、多くは九州地方で製作されたものと推察される。

東アジアでは、長江下流域と遼寧省に最も古い玦状耳飾が出土している。九州地方出土の古い玦状耳飾は、石材、形態などからみると長江下流域の類例ときわめて類似している。現在、中国からの搬入品は知られていないが、九州地方の玦状耳飾については、北陸地方とほぼ同じ時期に長江下流域からその風習が伝播したものと考えている。中国と同一の石材を使用することも参考となろう。今後、細かい点については、発掘資料の増加を待って検討したい。



鹿児島県倉園遺跡出土 玦状耳飾